# 『彼女について私が語れる二三の事柄』

柚木加非

つりた氏の作品を数年前見た時、僕は初めて同世代の、つまり、ベビーブームとかで糞味噌にされた層の感覚を、その初期の作品の中から受け取った。

大量の浪人を生んで、個々に全体からはみ出てしまったようなこの世代は、深夜放送や喫茶店、広場に集い、風俗にぬめり込みながら、実に多くの出来事を、現象的に目撃して来たのではないだろうか。

一つの完結した形ではなく、「ジンロク」「姫子」「栄光への脱出」「マダム・ハルコ」の所々に、彼女が無意識的に描いたものは、そのような世代の、どこにでも見られる日常性の一側面だった。

しかし彼女は、半ば趣味的に描くに留まった為、同世代の読者に多少なりともくすぐったくなるような親近感を与えただけで、その時代性に入り込んで行く事も、漫画作品として普遍的な価値を持つ事も、出来なかった。ただ僕は、彼女がそのようなアマチュア的な作品を書いた中で、同事に「女」を発表していた事を高評価したい。

新人に特有な物語性の欠如と、絵の未完成さを感じる他の作品とは別に、「女」は何気ないながら、表現上のスタイルと、何より感覚に於いて早く出過ぎた作品であり、彼女が自分の主題さへ見い出せば、彼女が、いわゆる描ける作家となる可能性を示している。

ガロに載らなかった一年間の作品と、「溝」を、中期のものとすれば、僕はそこに作家としての発言をわずかながらもし始めた彼女と一般的価値を持つ作品との、試行錯誤のプロセスを見たい。

「溝」は、その意味で最も、昇華された作品であろう。

今、僕は書き下し作品である「彼等」を読んで、それが作家としての彼女の新しい出発の契機となるだろうと感じた。「彼等」は、青年漫画と俗称されている領域で、他の漫画家が見い出さなかった時代性への接近と、現実への劇性の物語化を示している。

僕は「彼等」の内で彼女が、不確定の社会に対するメッセージとしての漫画を描き出したと思いたい。

独善がりではなく、内容の濃い、そして読ませる漫画を彼女が描き出したとすれば、僕は何より作家として彼女が成長した事に魅力を感じる。

彼女の絵が更に完成された時、僕はその作品に新しい表現と構成を定着した新しいストーリィ・テラーが現われるだろう、と信じている。

# つりたくにこに食パンの耳を！

上野昂志

　私が、つりたくにこにはじめて会ったのはいつ頃だったろうか。といっても、ここ一、二年は、顔を見たこともないから、初めて会った時期と、顔を見なくなったときとはあまりはなれてはいないだろうと思うのだが……ちょっと気になって『ガロ』を調べてみたのだが、無論、私がいつ頃つりたくにこと口をきいたかはわかるはずもないのだが、ただ古い『ガロ』をパラパラと眺めていて驚いたことは、つりたくにこが非常にはやくから『ガロ』に登場していることなのだ。『ガロ』66年3月号、水木しげるが児童漫画賞をもらった記念の号に、新人の入選作品としてつりたの『風と共に去りぬ』が載っているのが、最初である。私が『目安箱』に原稿を書くようになったのか、その翌月の4月号からだから、つりたは、私の先輩すじにあたる。と、まあそんなことはどうでもいいことだが、ただ、若い若いと思っていた人が、ずいぶん昔から描いていたのに気がついて、びっくりしたのである。

　ところで、私が会って喋っていた頃のつりたくにこには、確か、パンの耳を買ってきて食べているというようなことをいっていたと思う。当然といえば当然だろうが、つりたにとっては、それは少しも苦にならないこと、というよりも問題にならないことだったようである。そしてそれが、つりたくにこの強みであると同時に弱みでもあった、いや、あるのだろう。これは、あくまでも比喩的ないい方なのだが、つりたのマンガにとっては、パンの耳をかじっているつりたは問題にならない、あるいは逆に、パンの耳をかじっているつりたにとって、つりたのマンガは問題にならない。つりたのマンガを見ている限りでは、つりたとマンガとの関係はそのようなものであると思われるのだ。無論、比喩的にいってだが。

　確かに、つりたくにこには、特にその初期の作品において、水だけを飲んで飢をしのいでいるような絵を滑稽に描いてはいる。だが、私たちは、それを見て大笑いするだろうか、あるいは泣くであろうか。いずれでもないだろう。私たちは、ふふんと眺めて読みすごしていくのではないか。ここでは、パンの耳をくうことは、文字どおり問題ではないのだ。即ち、断ち切ってもいなければ、沈みこんでもいないのだ。いわば、パンの耳をかじって飢えをしのぐことの〈無論、比喩だよ〉生活の実質に、つりたはその足を踏まえていないのだ。だから、それを徹底して笑いとばすことによって断ちきるということでもなければ、そこに沈みこむことによって一篇の主題をつかみだそうとすることもない。きわめて中途半端な、笑いの種としてペン先にからげるという仕儀となるのだ。

　誤解のないようにいっておくが、私は、日常の上に薄紙をひいてそれをペンでなぞればいいというようなことをいっているのではない。まったくの荒唐無稽、虚構の虚構でいいのだ。もしそれが虚構の名に値するものならば。だが、これまでのリアリズム概念が、日常の断片をペン先にからげることといったようないい加減なつかみかたをされているのに見あって、虚構もまたもろいのである。生活のつかみかたが、あるいは生活をつかもうとする姿勢がやわならばやわなだけ、虚構もまたずぶずぶの虚構に終るしかないのだ。パンの耳をかじっていることそれ自体に向わなければ、パンの耳をかじらないことを描くことなどできはしないのだ。

　最近の詩なんかもそういう構えを失っているのが多いよ。ことばが拡散する、遊びにしかならないということは、ことばを拡散させまいという努力においてのみ明らかになることなのだ。最初から、何も語れないということを書こうと狙って書いてみても、そんなものは、さもしい狙いだけがちらちらするだけ、語れないということそれ自体を語ることなどできはしないのだ。おっと、少々脱線してしまったが、詩でもマンガでも、書こうとするものの位置には現在さしたる違いはないと思うよ。

　私は、こんな狭いところで些か蛮刀をふりまわしすぎたかもしれない。だから、イキにくらしていけないのかもしれないが……。最近めずらしくおもしろかった映画『昭和残侠伝・死んで貰います』にこんなセリフがあった。料理屋の板前になっている高倉健に、長門裕之が「兄貴はいなせだねえ」というと健さん答えて、「メじゃねえよ」

　つりたさん、今後精いっぱい頑張って下さい。

# 悪友のとも

おなじみ・ふじののたかこちゃんと(上)
なじみうすい釣田さん(下)
ふじのたかこ